

生活力と子ども時代

川下 満之

恥ずかしながら音痴の私がときたま口ずさむ歌がある。昭和三十年代前半の歌謡曲で「柿木坂の家」である。

「春には柿の花が咲き 秋には柿の実が熟れる…」

今、私が住んでいる地域においてさえも、庭先の柿や枇杷、きんかんといった季節の果物は成りつばなしで誰も採らない。私なんぞはその昔仲間と共に持ち主のおじさんに叱られながらも失敬して食したものだ。

それにしても今の子供たちにはこの歌詞など意味も分からぬのでは無いだろうか。

今、見渡せば地域で子供たちが群がって遊んでいる光景を見ることが無い。【子供時代の縦社会】

私の子供のころ、地域では「モグラ打ち」という正月十四日の行事があった。町内で祝いの事（結婚、新築等）のあった家々を回り、まず青年団が家の中で謡をあげる。その後係りの掛け声で二メートルぐらいの細い樫の木の先を藁でくるみ縄で



イラスト=メトロコンピュータカレッジ (岡 和彦)

しかし、風呂を沸かすためには何杯も井戸水を汲まなければならない。重労働であった。井戸に電動ポンプがついたときは何と素晴らしいものかと感動した。燃料は薪だった。まずマッチで紙に火をつけその上に柴を置き、そして薪へと火を大きく安定させる。冬の時期、火を管理するのは暖かくて好きだった。

学校が休みの日は家の前の掃除もやらされたし、猫の額ほどの畑仕事の手伝いもやらされた。何事も慣れると手付きも良くなってくる。時には飯も炊いた。指が水加減の物差しだった。経験を積むことは重要である。年を取ってから結構身体が覚えているものである。

ところで昨今、食に関しては気軽にレストランに入れるし、バイキング形式もある。あるいは家庭で食べるにしても弁当屋、惣菜屋等々がある。ここに存在し手軽に入手できる。さらには冷凍食品も豊富である。こうした環境の中で、はたして家庭の味、お袋の味は健在であろうか。我が家ならではの一品やずつと食べ続けてきた料理、味付けがあった。

新聞で「孤食」という言葉を知った。母親が働いているため夕食を一緒に摂れない、そして子供が塾に行くため、準備された食事を一人でするということだ。

小学生のころにはぜひ食事の準備の手伝いをさせたい。料理の手順、味付け、道具の使い方等々得るものが多い。母子の会話は大きな価値がある。そうするなかで食事のありがたさも分かり、感謝の心や「いただきます」の意味も分かるのではないだろうか。

「電気、ガスがストップしたら生活できますか。」そういった問題が発生したら国が悪いとか社会が悪いとか言うばかりでは何も始まらない。周りと協力して生活する術を考え実行しなければならぬ。そういった遅しさを身に付ける教育をどの時点かで位置づけなければと思うのは単なる気苦労だろうか。

生活力というのは、知識だけで得られるものではなく経験と知恵が重要である。学習(体験)して身につくわけで、小学生のころまでが重要な時期だと考える。教科の学力は大いに論じられているが、併行して年齢に応じた経験・体験をすることが生活「学力」を高め、人生の基盤を盤石なものにできるだろうし、遅い人材育成のコアであると確信する。(メトロ・コンピュータ・カレッジ校長)

巻いた道具で庭を打つ。いわゆる、その家の「いやさか」を折ってモグラを叩き出すというものである。

今、またその行事が復活している。喜ばしいことだ。ただ昔と違うのは、道具作りから全て子供会担当の親がしていることである。しかも道具は樫の木ではなく竹を使っているのですぐ折れてしまう。昔はある年齢に達し、山に樫の木を取るために年長者について行くと、鎌や小刀の使い方や、巻き藁がすっぽ抜けないために枝を残すことも教えてくれた。これらのことは次から次へと年少者に順繰りに教え伝えていった。昔は親の出る幕はまずなかった。

メジロ獲りにも最初は木の枝につけた「鳥もち」持ちでついでいった。ワクワクしながらも仕掛ける場所に着くまで鳥もちを途中の木の葉などにくっつけないようにするのはこの上も無く緊張したものだ。失敗して怒られたこともあった。獲ったメジロを分けてもらい飼えるということが非常に嬉しかった。鳴き声が良いたか、金筋が入っているとかがいっぱしの飼い手みたいなのを言っていた。

地域では年齢差に関係なくよく遊んだ。年上の者が仕切り、ある意味で責任も持つ。喧嘩を仲裁したりもしてくれる。頼りになるし、尊敬の対象でもあった。社会性を身に付ける場であった。ある時は近所の高校のお兄さんがラジオなるものを組み立てているのを見て「なんてすごいんだ」と思い、いつか僕も作りたいと一つの目標にした時期もあった。

こういった子供社会、近所社会が無くなったのはいつの頃だろうか。少子化が進行しているのは事実であり、TVとゲームの普及もすごい。なにも外に出て遊ぶ必要性が無い(?)のかもかもしれない。群れて遊ぶのが少年時代だと思っていた。養老孟司氏は「子どもは自然そのもの」と言っている。中には塾に行かなければ友達がいけないという。考えさせられる。

【家庭での子供の役割】

私の家に水道が引けるまでは井戸水であった。おいしい水であった。

風信

○年の瀬となりましたね。「あした待たるる宝船」が参りますでしょうか。

○今月は先ず、外山幹夫先生に私の旧記の中に誤りがあり深くお詫言せねばならぬ事がありました。それは昭和五十三年私が執筆しました「長崎ひとりあるき」P2の中で、先生の説として「長崎氏がこの地に住んでいたのが長崎という地名ができたであろう」と記したことです。之はまったく私の誤解で先生の説は「長崎の地に住みついていた者が其の地の地名をとって長崎氏を称した」とするのが正当であり、今まで私の誤記によって先生に御迷惑をおかけした事について深くお詫言申し上げます。(越中哲也)

○私の十一月は、四十年ぶりに全くの病院ぐらしでした。入院中、一番さびしかったのは、二十六聖人の結城神父様の訃報に接した時でした。私と同じお年でしたし、私には本当に、色々の事を親切に御教え戴いていたからです。私は動かれぬ床の中で、暫く、じつと黙想させて戴いておりました。

○十一月二十四日長崎市で我が国では初めての列福式がありましたね。この記念式典で、私たちは何か大きな信仰の響きを考えさせられるものがありました。さて皆さんは、今回の「かくれキリシタン」時代と時を同じうして、肥後・薩摩方面では「かくれ念佛」という事が明治初期まで行われていた事は御承知でしたでしょうか。其処にも亦、信仰の自由をうばわれた悲しい物語が多く伝えられていたのです。

○月末事務局の丹田女史が来られて、新年度発刊のながさきの空二十号記念誌の事、新年集いの事、一月の長崎学講師依頼の事、古文書研究会の事等々連絡して下さいました。丹田さん、お一人で大変のようでした。

○十二月一日、事務局に出勤、質問事項多し、その第一は、昔の年末年始行事についての問い合わせで山積みでした。昔の門松かざりは、根引の松は、長崎雑煮は、柱餅は、幸木とは、暮の墓参とは、手かけ台とは、暮の鍋料理くぼりとは、年の瀬の蕎麦由来の事、お絵像様かざりの事、若水汲みの事、華街の餅つき、荒神様鏡餅の事、正月チャンメラ吹き、正月かざり物の事、等々がありました。私は足立敬亭、足立正枝、林源吉、渡辺庫輔と各先輩方の旧記を取り出し、どうにかお答えできました。

○さて最後に、何はともあれ、新年の門松をお建てになられて、良いお年を御迎え下さいませ。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 二F

